

趣旨説明

六世紀半は日本に仏教が伝来して以来、仏教は日本文化を形成する大きな要因となり、現在まで至っている。そして、日本が近代化していく背景には、常に仏教の存在があったとも指摘されている。日本仏教研究の主流は、古代・中世にあったが、吉田久一『日本近代仏教史研究』（吉川弘文館、一九五九）、池田英俊『明治の仏教』（評論社、一九七六）、柏原祐泉『日本仏教史・近代』（吉川弘文館、一九九〇）などを初めとして、明治期以降の近代仏教研究の成果が公刊され、ここ数十年、近代仏教に関する研究が増えてきている。このような背景から、一九九二年には「日本近代仏教史研究会」が設立されるに至った。

仏教について、今、その境界が曖昧とは言え、また、その区別が無謀だという批判は承知の上、仮にその仏教を「信仰対象としての仏教」と「研究対象としての仏教」と区別してみよう。紀元前六世紀頃にインドで仏教が成立してから、すでにインドにおいて、数多くの論書（アビダルマ）が著されたことから、仏教は

佐藤 裕之

この二つの面を持ち、仏教との関わりは、多くの場合、この二つの面を内包していたことが分かる。その事情は中国でも、チベットでも、そして、日本でも同じであった。インドではナーガールジュナ（二世紀頃）、ヴァスバンドウ（四世紀頃）など、中国では智顗（五三八―五九七）、玄奘（六〇二―六六四）など、チベットではツォンカパ（一三五七―一四一九）など、日本では聖徳太子（五七四―六二二）、最澄（七六六―七六七―八二二）、空海（七七四―八三五）、凝然（一二四〇―一二三二）などの仏教との関わりが如実にこのことを示している。これらの先駆者たちは、信仰対象として仏教と関わっていただけでなく、研究対象としても仏教に関わっていた。

本シンポジウムでは、「研究対象としての仏教」を「仏教学」とし、明治期以降の仏教学を「近代仏教学」とするものであるが、「仏教学」自体は、ナーガールジュナなどが研究対象として仏教に関わってきたように、決して近代的なものではない。その伝統は

脈々と中国、チベット、日本に受け継がれてきている。

しかしながら、近代以前の「仏教学」には見られなかった研究方法が、近代になって見られるようになった。それは、日本における仏教学が、明治期以降の近代になって、西洋の仏教学研究の方法と成果を取り入れ、展開することになったことである。近代仏教学の基礎を築いた南條文雄（一八四九—一九二七）や高楠順次郎（一八六六—一九四五）などが西洋に留学し、イギリスのマックス・ミュラー（一八三二—一九〇〇）を初めとする研究者に師事したことからもそれは明らかである。歴史的に仏教の文化的背景を持たない西洋にあつて、仏教との関わりは、「信仰対象としての仏教」よりも「研究対象としての仏教」が優先し、あるいは、捨象するかたちで始められたとも言える。少なくとも、西洋における仏教との関わりは、日本におけるそれとは大きく異なっていたことは間違いない。キリスト教とギリシャ以来の伝統を受け継ぐ哲学という文化的背景がある西洋において、仏教はその組上で、研究された。従つて、西洋における仏教学研究は、キリスト教や哲学との比較という面を常に持っていた。そのような研究方法と成果を取り入れた日本の近代仏教学は、自ら「比較思想」という面を持つことになった。

本シンポジウムでは、「近代仏教学」と「比較思想」をキーワードとし、基調講演者と二名のシンポジストによつて、近代仏教学の意味を問い、比較思想という視点から近代仏教学をとらえることを目的とする。

基調講演は、西洋の仏教学研究方法を導入する端緒を開いた高

楠順次郎について、石上和敬氏が「高楠順次郎における海外—海外体験とその果実—」という演目で、高楠順次郎の業績や事業における西洋の關係が講じられる。仏教学研究にとつて重要な仏典を編纂した「大正新脩大藏經」の着想はイギリス人、ドイツ人からの勧めによつたとの背景が述べられ、興味深い。シンポジストの種村隆元氏は「比較「思想」から見た密教研究」、碧海寿広氏は「昭和初期の仏教／キリスト教論争—高楠順次郎を中心として—」というタイトルで問題提起を行う。密教はインド中世初期に隆盛を誇つた「タントラ（あるいはタントリズム）」の中に位置づけられる仏教の一形態であるが、シヴァ教を初めとしたヒンドゥー教タントラとの比較により、種村氏は、両者の具体的な關係をより詳らかにする研究が求められていると指摘する。碧海氏は、西洋における仏教研究の重要なテーマであつた「仏教とキリスト教」が日本の近代仏教でもテーマになっていた点を示し、検討が加えられている。

これらの基調講演とシンポジストの問題提起によつて、比較思想という視点から、近代仏教学がとらえられ、近代仏教学研究に新たな視点が提供され、近代仏教学研究がより進展することを期待する。

（さとう・ひろゆき、インド哲学、武蔵野大学院教授）